

今日から
始める

認知症を予防・克服するために 認知症対策

認知症の代表的な4種類の型を知る

一般的に認知症と呼ばれているものは、一つの病気ではなく、さまざまな原因によって認知機能が低下し、日常生活や仕事に支障をきたすようになった「症候群」のことをいいます。今回は、アルツハイマー型認知症をはじめとする、認知症の代表的な4種類の型をご紹介します。

認知症は、厳密に言えば100種類くらいの型があると考えられている「症候群」です。それらをひとくくりにすることは、例えば、がんや盲腸、食べ過ぎなど、異なる原因で起こる腹痛を「腹痛症」としてまとめてしまうようなもの。それでは、適切な対策を講じることはできません。認知症の代表的な4種類の型を知ること、早期発見と効果的な対策に努めましょう。

●アルツハイマー型認知症

認知症のなかでもっとも多いのが、このアルツハイマー型認知症で、日本人の認知症の約6割～7割を占めるといわれています。この型の認知症の場合は、「アミロイドβ」というたんぱく質が原因となり、脳の神経細胞が破壊されることで、もの忘れをはじめとする記憶障害や見当識障害などの症状が起こると考えられています。これらの症状は、非常に長い時間をかけて進行するため、高齢になってから有病であることが判明することも少なくありません。

●血管性認知症

脳の血管が破れたり、詰まってしまったりすることで起きる認知症です。かつては、日本人の認知症では一番多く見られ、現在ではアルツハイマー型に続いて2番目に多い認知症となっています。脳の血管障害が原因であるため、障害が起こってから症状が現れるのが早いことが特徴です。身体の軽い「まひ」や運動障害が起こったり、すぐに泣いたり笑ったりしてしまうような、感情のコントロールがうまくできなくなる「感情失禁」が見られることも少なくありません。

●レビー小体型認知症

「レビー小体」の構成たんぱくである「αシヌクレイン」が原因となり、脳の後部にある後頭葉の血流が低下することで起きる認知症です。幻覚が見えたり、歩行が困難になったりすることが特徴で、転倒してしまうことが多いため、「転ぶ認知症」とも呼ばれています。

●前頭側頭型認知症

脳の前頭葉や側頭葉と呼ばれるところが萎縮することで起きる認知症で、40代～60代くらいの若年性認知症の人が、この型である場合が少なくありません。感情などをコントロールしている前頭葉や側頭葉が変化してしまうため、暴力的になったり、場合によっては万引きをしてしまったりと、反社会的な行動が見られることもあります。

認知症における早期の効果的対応に取り組むためにも、その発見が遅れてはなりません。とりわけ、アルツハイマー型認知症は進行が遅いため、その特徴を理解して、十分に注意を払うようにしましょう。

アルツハイマー型認知症の主な症状

記憶障害

初期に多く見られる症状です。出来事の全体が記憶から抜け落ち、自分がそれを体験したこと自体を自覚できなくなってしまう。

見当識障害

記憶障害に次いで早い時期に出ることが多い症状で、「今がいつか(時間)」「ここがどこか(場所)」「相手が誰か(人)」などがわからなくなってしまう。

失計算・失語

お金の計算や質問に対する適切な返答ができなくなります。人の会話も理解できなくなる場合があります。

暴言・暴力

認知症が進行すると、脳の機能が低下して感情をコントロールすることが難しくなり、暴言や暴力が見られるようになります。

アルツハイマー型認知症は、長い時間をかけてゆっくりと進行することが多いため、一緒に暮らしている家族などは気づきにくいことが多い。その特徴を理解して、早期発見に努めることが求められる。



浦上 克哉 Urakami Katsuya

鳥取大学医学部教授、一般社団法人日本認知症予防学会代表理事、日本認知症予防学会専門医、公益社団法人日本老年精神医学会理事。認知症診断・予防の第一人者として、外来での診察と治療、予防、ケアなどを総合的に行っている。また、講演会やメディアを通じて、認知症の予防と早期発見、克服などに関する実践的な啓蒙活動に取り組む。